水島 治郎

（オランダ政治史・ヨーロッパ比較政治）

1　君塚直隆『貴族とは何か――ノブレス・オブリージュの光と影』新潮選書

議会制民主主義の母国であり、しばしばデモクラシーの見本として扱われるイギリスは、今もなお貴族が健在であり、上院に議席を確保し、政治的・社会的な影響力を保持している。ではなぜイギリスで貴族が残存したのか。他のヨーロッパ諸国、中国、日本の貴族の展開とも比較しつつ、歴史と現代に生きる貴族の本質に迫る力作である。

2　中澤聡『近世オランダ治水史――「健全なる河川」と側方分水をめぐる知識と権力』東京大学出版会

ライン川、マース川などの河口付近に干拓を通じて国土が形成されたオランダでは、水の制御が国としての最大の関心事となった。本書は特に一八世紀のオランダにおける科学的河川管理の展開を、「健全なる河川」「側方分水」などをめぐる議論を描きつつ明らかにした労作である。科学者、政治家、行政官が激しく論争しながら「あるべき河川とは何か」を追究するさまは、水害にしばしば見舞われる日本の河川のあり方を考えるうえでも示唆的だ。

3　陳祖恩『上海――記憶の散歩』銭暁波・森平崇文訳、勁草書房

租界以来の街並み、歴史的建造物などをめぐりながら、国際都市・上海の都市空間の歴史の深みを味わうことのできる名著である。上海の街路のそれぞれが、歴史の重なりの上に成立し、中国、西洋諸国、日本などの各国の文化が交差して独特の香りを漂わせている。私事で恐縮だが、二〇二三年夏、初めて上海を訪れる前にこの本を読んだことで、街歩きがぐっと充実したことを懐かしく思い出す。

4　アンドレイ・プラトーノフ『幸福なモスクワ』池田嘉郎訳、白水社

戦間期ソ連の代表的作家の一人として、ブルガーコフと並び称されるプラトーノフ。本書は一九三〇年代に執筆されたものの刊行されず、一九九〇年代にようやく日の目を浴びた作品である。孤児院育ちで「モスクワ」と名付けられた女性の数奇な運命を通し、社会主義建設が大規模に進められ変貌を遂げるモスクワの街の雑踏と熱気、葛藤と挫折を描き出す。

5　原武史『歴史のダイヤグラム〈2号車〉――鉄路に刻まれた、この国のドラマ』朝日新書

みすず

読書アンケート 2023

識者が選んだ、この一年の本

みすず書房編

139名の方々に、新刊・既刊を問わず、2023年中にお読みになった本のなかから、印象深かったものを、挙げていただきました。

鉄道にまつわる歴史を鋭くえぐる、朝日新聞の人気連載をまとめた新書の「二号車」である。どのエピソードも興味深いが、千葉県民の私としては、鉄道のあり方に注目して「千葉県」が東京から「断絶」した存在であることを明らかにした、原氏の独自の分析が印象深い。氏の提案する、「夢の房総半島一周列車」の実現もひそかに期待している。

読書アンケート 2023

識者が選んだ、この一年の本

みすず書房編

2024年2月16日　第1刷発行

発行所 株式会社 みすず書房
〒113-0033 東京都文京区本郷2丁目20-7
電話 03-3814-0131(営業) 03-3815-9181(編集)
www.msz.co.jp

本文組版 キャップス
印刷・製本 中央精版印刷

© each contributor 2024
Printed in Japan
ISBN 978-4-622-09689-4
[どくしょアンケート2023]
落丁・乱丁本はお取替えいたします